黒沢幸子博士の御退官

岩　槻　邦　男　（附属植物園）

植物学教室助手の黒沢幸子博士は今年度一杯で定年となり，退官される。

黒沢さんは帝国女子理学専門学校を昭和22年に卒業され，同校に出講しておられた亘理先生の御紹介で，原寛助教授（当時）の研究室に勤務され，原先生が積極的に推進しておられたバイオシステマティックスの一翼を担い，細胞分類学の研究を始められた。1960年に日本の植物についての研究成果を発表されて以来，17篇の原著論文を公表された。特に，原先生を中心に，東京大学の研究グループがめざましい成果をあげてきたヒマラヤ植物の研究では，フイールドの調査にも参加され，細胞分類学の分野で大きな貢献をされた。

筆者の個人的な関わりを書かせていただくのは恐縮であるが，まだ大学院生の頃に東大の資料標本の研究をさせていただくために原研究室へお伺いした際にお世話になった頃から数えれば，もう30年以上おつき合いを願っていることになる。ヒマラヤ植物の研究では，最初から研究グループに加わるようお招きいただき，1972年には現地調査のメンバーにも加えていただいたので，その一環としていろいろ御面倒をお掛けすることになった。そして，1981年に東大に移ってからは，厳密にいえば，植物学教室と植物園と所属は異っていたものの，教室の先生方の御理解もあって，毎週の植物園研究部セミナーには御出席いただいたし，1984年には，学術振興会の国際共同研究のメンバーとして，中国雲南省の調査に御協力いただくことができた。

研究の周辺でも，黒沢さんが寄与されたことは多い。1966年に東京で太平洋学術会議が開催された時には，植物学部門の責任者だった原先生をよく補佐され，とくにその際企画されたバイオシステマティックス国際シンポジウムでは裏方として働らかれ，参加者に喜んでいただける舞台作りに盡力されたことは関係者にはよく知られている。ヒマラヤの調査では，ブータンやシッキムなどでは王室を含め各階層の人との親交が深く，国際人としての Dr Kurosawa はここでも著名である。

黒沢さんが研究されたのは高等植物一般であるが，その中でも，身近にありながら基礎的な研究がまだまだ不完全なアオキやアカネなどや，葉の表面に花がつく姿が人目を惹くハナイカダなどで，貴重な業績を上げられた。黒沢さんの学位論文も，一緒に研究をされた原教授の東大へ提出されたのでなく，外部の東北大学へ提出され，客観的な評価を受けられたものであった。

教務技官でおられた間には、植物学教室の教務関係の事務一切を処理されていた。筆者も，授業の担当，大学院生関係の事務一切，またカリキュ

ラム委員会でと，その面でもいろいろお世話になってしまった。

黒沢さんが今年の３月で退官されると聞いて信じられないという顔をする人が多い。お見かけするだけではとてもその年齢に達しておられるとは思えないからである。その若さで，御退官後も好きな研究を続けたいという希望をお持ちのように伺っている。身につけられたテクニックを駆使して，良いお仕事を続けられるよう期待している。とりわけ，ヒマラヤ産の植物などについては，生植物の貴重な系統を植物園に移していただいており，御自身の研究に活用していただくだけでなく，利用したいと願っている内外の研究者の希望に沿えるように，情報などを整備していただくこともお願いしたいと考えている。

御退官を控えて，ずっと御一緒に暮らしておられた御母堂だけでなく，長年そのお世話をされて家族同様につき合っておられた方もお亡くなりになる悲しい出来事が続いたようであるが，御退官を機に心機一転して，親しい植物と共に歩む日々を健康でお過しいただくよう念じたい。41年に及ぶ植物学教室でのお仕事について，お世話になった数多くの関係者の１人として心からお礼を申し上げるために，御退官という一つの区切りになるこの機会を利用させていただきたい。